

主日礼拝説教

コリントの信徒への手紙一 12章 27~31節

『教会とは 一、信仰共同体』

2026年 2月 8日

手紙の差出人はパウロです。受取人は、コリント教会です。パウロはコリントの教会員に対して、「教会はどういうものなのか」これを懇切丁寧に説き明かしていきます。12章の12節以下を参照しましょう。

体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。

(12:12)

教会を人の体にたとえます。手があって、足があって、耳があって、目がある。それぞれに違う。そして違うそれぞれが一つに結ばれて、人の体は出来ている。足が手に向かって「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるわけではない。互いに補い合って一つの体を作っている。いらない部分はない。教会もこれと同じだ、というわけです。

今日の所はこの繰り返しです。人体のたとえから現実の教会へ視点を移します。冒頭の27節から読んで行きましょう。

あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。(12:27~28)

使徒は、復活のキリストに直接お目にかかった人です。復活のキリストに出会って、主から伝道の使命を頂いた人が、使徒です。初代教会では、教会の核心を担う人たちです。第二の預言者。聖霊の働きに押し出されて、神のメッセージを告げる人です。三番目に教師。信仰の指導を与え、教会の歩みを導く人です。さらに奇跡を起こす人がおり、病をいやす人がいました。貧しい人や、身寄り頼り

のない人を助ける人がいた。教会の運営を管理する人がいました。パウロは、誰が上で誰が下かは考えていません。皆が集まって、互いに生かし合っているというのです。

皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。(12:29~30)

立場の上下。働きの大小。パウロはこれらを考えていません。みんな違うのです。「教会は、違う皆がキリストに結ばれて互いに生かし合っている」これを伝えているのです。

話の内容は理解できます。考えたいのは、パウロはどこからこのような教会理解を得たのか、です。本を読んで学んだものとは思えません。パウロはこのような教会を経験したのです。主の教会はどういうものなのか、体験して学んだのです。

聖書を開いていきたいと思います。新約聖書の 245 頁。使徒言行録の 16 章 11 節から 15 節までを読んで行きましょう。

わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした。ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話しを聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊りください」と言って

わたしたちを招待し、無理に承知させた。(言行録 16:11~15)

フィリピ伝道の最初です。リディアという女性に出会いました。この人は非ユダヤ人です。パウロが語る福音に心を打たれました。家族みんなで洗礼を受けます。そしてリディアは、「家に来てお泊りください」と言います。「一晩泊ってゆっくりしてください」という話ではありません。「我が家を伝道の拠点に使ってくれ」というのです。パウロはためらいます。リディアは女主です。いくらなんでもはばかれる。リディアは聞きません。「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊りください」無理無理にパウロを承知させます。これが、フィリピ教会の始まりです。リディアは女性です。異邦人です。しかし、主の霊に満たされてパウロを説得しました。そしてここから、フィリピ伝道が前進して行ったのです。

17章を開いてみましょう。247頁。「テサロニケの騒動」という見出しがついています。5節から読んで行きます。

それで、彼らのうちのある者は信じて、パウロとシラスに従った。神をあがめる多くのギリシア人や、かなりの数のおもだった婦人たちも同じように二人に従った。しかし、ユダヤ人たちはそれをねたみ、広場にたむろしているならず者を何人か抱き込んで暴動を起こし、町を混乱させ、ヤソンの家を襲い、二人を民衆の前に引き出そうとして搜した。しかし、二人が見つからなかったので、ヤソンと数人の兄弟を町の当局者たちのところへ引き立てて行って、大声で言った。「世界中を騒がせてきた連中が、ここにも来ています。ヤソンは彼らをかくまっています。彼らは皇帝の勅令に背いて、『イエスという別の王がいる』と言っています。」これを聞いた群衆と町の当局者たちは動揺した。当局者たちは、ヤソンやほかの者たちから保証金を取ったうえで彼らを釈放した。(言行録 17:4~9)

舞台はテサロニケの町です。パウロの伝道は成功したのです。信じる者たちが起きました。ところが、一部のユダヤ人はこれを妬みました。「彼らは皇帝の勅令に背いて、『イエスという別の王がいる』と言っています。」「皇帝反逆を企む者たちが町に来ている」偽りを語って騒乱を起こします。「ヤソンの家が襲われた」と言います。ヤソンは信徒のリーダーです。自分の家を解放して、伝道の拠点にしていました。そこで暴徒はパウロを探してヤソンの家を襲ったのです。パウロはどこにいたのでしょうか。テサロニケの信徒たちが逃がしたのです。パウロの盾になったのはヤソンです。「あの男がリーダーだ。掴まえろ！」この間にパウロは町を脱出した。パウロは辛かったはずですが、彼は伝道者です。苦しんでいるのは自分が導いた人たちです。「パウロはここにいる！」暴徒の前に出て行きたかったです。自分を守るために信徒が苦しむなどはパウロの心にはありません。けれども、留められたのです。「パウロよ。あなたに万一のことがあればだれが福音を伝える。この町のことは俺たちに任せてくれ。あなたは逃げろ。福音を伝えてくれ。」パウロは、断腸の思いでテサロニケの町を出たのです。

パウロは、力づくで伝道したわけではありません。生かされて伝道したのです。福音を宣べ伝えます。信じる者が起きる。今度は信じる者たちに守られる。互いの思いと力が響き合うようにして、伝道は前進しました。

今日の所に戻りましょう。教会の働きに上も下もありません。皆で生かし合っているのです。どれ一つが失われても、体は痛いのです。最後にパウロは次のように述べています。

あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるように熱心に努めなさい。(12:31)

これは、コリント教会の中にいる霊的熱狂主義者に対する言葉です。彼らは霊の賜物を持っていました。人に出来ないことが出来ました。そこで、威張っていた。自分たちは格の高い者として、人々を見下していました。当然教会は混乱します。このようなことがあってパウロは、懇切に教会とはどういうものかを説き明かしているのです。賜物を自慢するのではなくて、愛を互いに仕え合えと教えているのです。

私たちの日常を顧みれば、頑張り続けないと生きられない現実があります。しかしこの中で誰かに助けられています。現実の厳しさや、自分の頑張りばかりを見ていると、私たちは人の優しさを見失います。自分の顔が、固くて冷たくなるのです。

神さまの恵みは、人を通してやってきます。あなたは自分の心で主を信じています。同時に、あなたは独りで信じる事が出来たわけではない。あなたの救いを願って助けてくれた人、教えてくれた人、祈ってくれた人が何人もいるのです。今もそうです。これを思い出すのです。教会の豊かさが見えてきます。教会の中にキリストが、今、生きて働いていることを知るようになります。このようにして私たちは主に触れていく。互いに生かし合い恵みの神秘に触れていく。これが教会です。

祈り

父なる神さま。教会に導かれて、福音の救いを頂いた私たちです。恵みを数えることが出来ますように。生かし合って生きてきた、これまでを思い出すことが出来ますように。そして主よ、今生きて働くあなたご自身に、何度も繰り返して、出会うことが出来ますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。